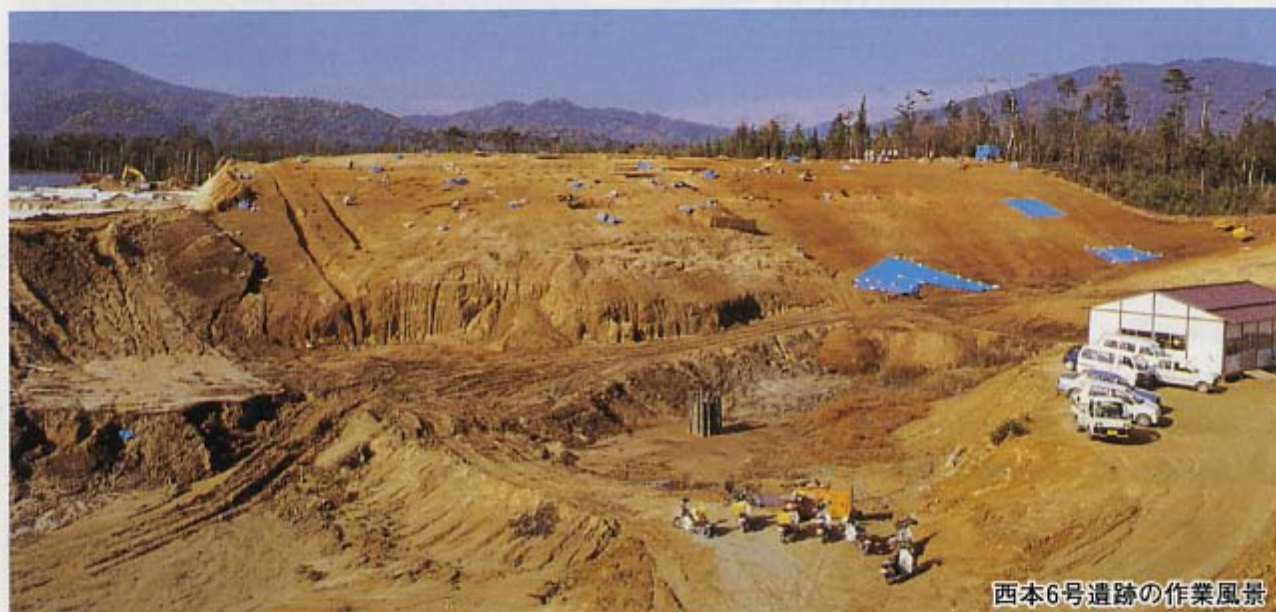


阿岐のまほろば Vol. 3

古代の神殿跡を発掘

西本6号遺跡(高屋町大畠^{おおばたけ}～杵原^{きねはら})



西本6号遺跡の作業風景

西本6号遺跡は、高屋町大畠から杵原にかけての丘陵上に広がっています。

調査の結果、弥生時代中ごろの竪穴住居跡や貯蔵穴などと、飛鳥時代終りごろの建物跡群やそれを取り囲む土塁の跡などが明らかになりました。

飛鳥時代終りごろの建物跡は、一辺1 m程度の方形の穴に柱を立てた掘立柱建物跡です。大小あわせて10棟あまりが建っていました。中央のものは8 m×4 mの規模で、屋根の長さは11 m以上と考えられます。この大きな屋根を支えるため外側には、棟持柱と呼ばれる太い柱が立っていました。また、南側には10 m×7.5 mの建物跡がありました。これは室内を広くするために柱を二重に立てた四面廂^{ひさし}と呼ばれるものです。大陸から導入された新たな技術を用いていました。

棟持柱を建てた建物は構造的に屋根が大きく、象徴的なものといえます。現存する建物では、伊勢神宮正殿など神社建築に多くの類似点がみられ、祭祀を執り行っていた神殿の跡と考えられます。



西本6号遺跡位置図 (1:50,000)

古代の神殿

わたしたちの祖先は、古くからあらゆるものに神霊が宿ると信じ、一方では祖先の神霊である祖霊を祭っていました。弥生時代、稲作を中心とした農耕社会の発達のなかで、これらに稲作信仰が結び付き、生命力・生産力を基にした産霊信仰が発達しました。

こうしたなか、古墳に象徴される階級制度の発展は、各地の豪族が民衆支配の手段のひとつとして、これらの祭祀を取上げてしまいました。豪族たちが彼らのまつりとして行っていたようです。ところが、奈良時代、律令制度の広がりとともに、この祭祀も中央政府に掌握され、国家の統制を受けるようになります。

さて、古くから存在する神殿建築をみると、大きく倉庫系神殿と住宅系神殿の2つに分かれます。

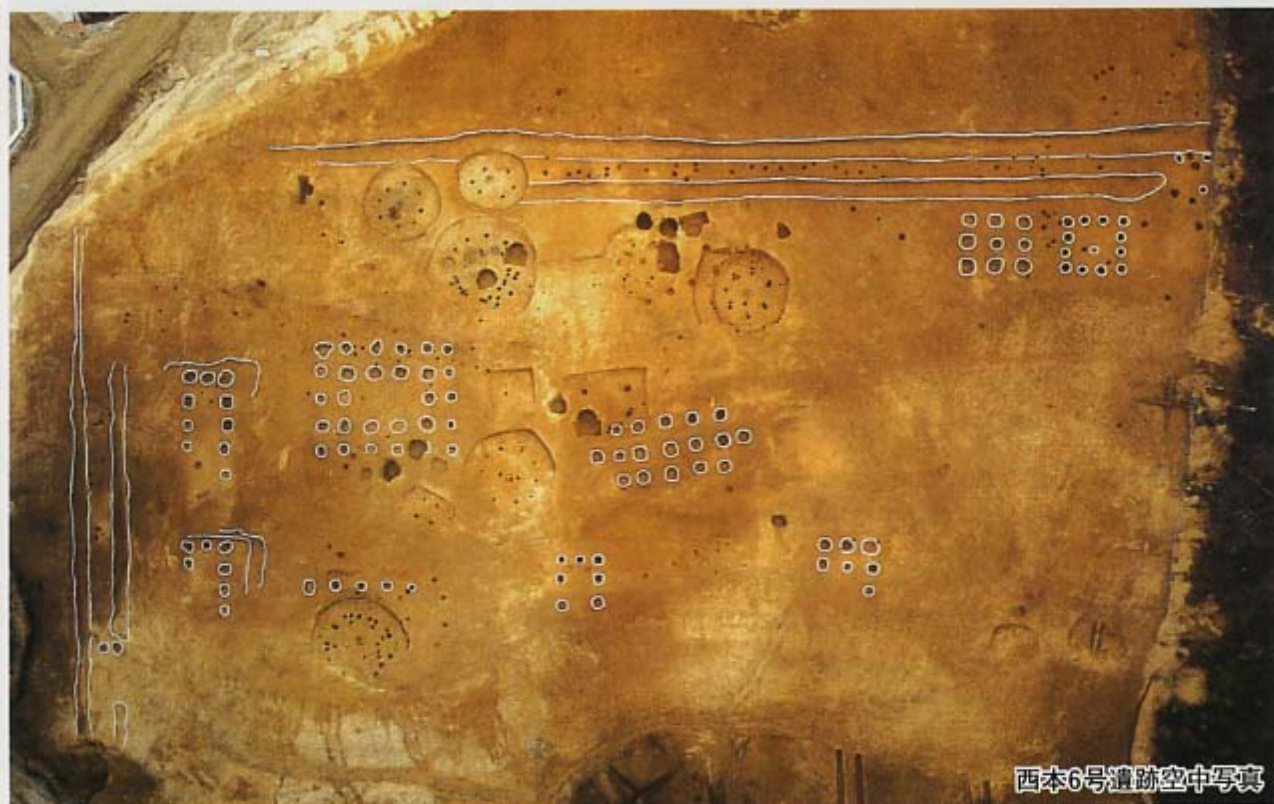
倉庫系神殿は、扉以外すべて板壁で塞がれており、扉を閉めると、室内は暗闇となるものです。このため、建物の外側で礼拝を行っています。伊勢神宮正殿などがこの典型例といえます。

住宅系神殿は、扉以外にも窓のような開口部があり、扉を閉めても室内に外光が入るものです。礼拝は建物の中でも行われます。出雲大社本殿などがこの典型です。

この差が何に起因しているかは明らかにできませんが、稲の倉庫＝稲作信仰と、先祖の住宅＝祖霊信仰とも捉えることができます。

西本6号遺跡の中央に建てられた建物は、高床の倉庫風のものです。柱はすべて床下で止まり、その上にせいろのように板を積上げて、周囲の壁を作っていたと考えられます。扉を閉めると室内は暗闇になります。また、屋根はカヤ葺きだったようです。復元すると高さ6m、屋根の長さが11m以上と、規模が大きく象徴的な建物です。

古墳時代の中ごろ、5世紀にはこの西条盆地に県内最大の三ツ城古墳が造られます。この古墳を築いた豪族たちの消息は不明ですが、200年後、その子孫たちが古墳の代わりにこの場所に神殿を造り、祭祀を行っていたのでしょうか。



西本6号遺跡空中写真



西本6号遺跡想像図

出土したうつわと道具

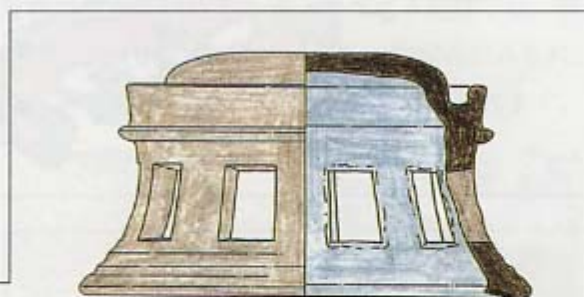
西本6号遺跡では、多量のうつわが出土しました。大半のものが須恵器と呼ばれる陶器です。堅く灰色をしており、登窯で焼かれています。

種類を見ると、蓋が付いた椀が最も多く、脚付きの皿などもあります。また、須恵器の甕や壺などもありますが、直接火にかけられないため、水やお酒を入れていたのでしょう。この他、土師器と呼ばれる素焼きの椀や鍋なども若干出土していますが、鍋の出土量が一般の集落跡に比べて極端に少ないようです。

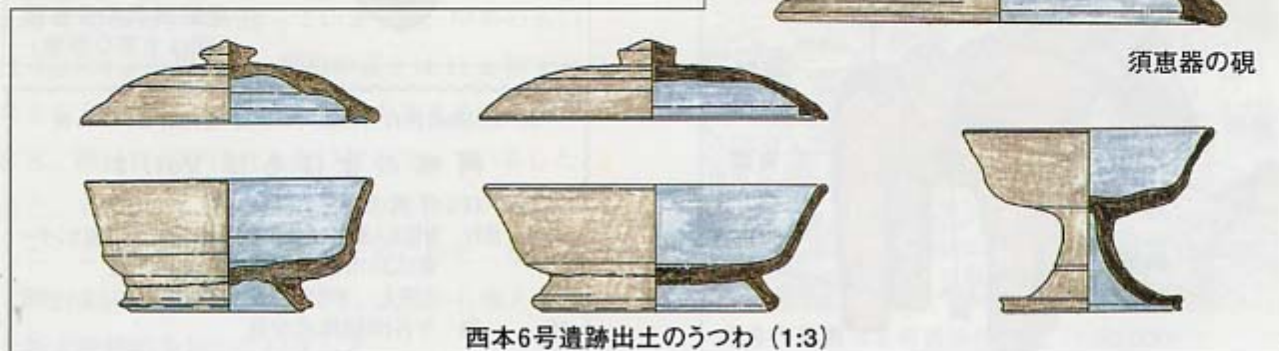
一方、^{すすり}硯の出土は字が書ける人がいたことを示しています。形態的には円面硯と呼ばれるもので、

横の溝に水を溜め、上面で墨を擦っていました。透し窓は12個開けられ、脚が高いものです。

市内の三永水源地や鏡山の周辺、さらに高屋町内では、須恵器が焼かれた窯跡が数か所で発見されています。このことから、西本6号遺跡で使われた須恵器もこの付近で焼かれていたことが考えられます。



須恵器の硯



西本6号遺跡出土のうつわ (1:3)

